

献呈の辞

宮崎隆次先生を送る

酒井啓子

宮崎隆次先生は、二〇一四年三月をもって、千葉大学を退職されました。一九八四年に、前任の岩手大学から千葉大学法経学部に移任されて以降、三〇年間にわたり同学部に奉職され、日本政治史および日本政治論に関する研究に積極的に邁進されるとともに、日本政治に関する多くの授業を担当し、本学の教育活動に大きな貢献をされました。

筆者が本学に着任したのはわずか二年前で、宮崎先生の研究内容をじっくり伺う機会もありませんでした。だが、二〇一四年二月四日に行われた最終講義を感銘深く伺いました。そこでとりあげられた「大正デモクラシー」再考」は、先生が一九七〇年代以来一貫して追求されてきた根幹となるテーマであり、先生のこの問題に取り組む熱意がひしひしと感じられました。途上国政治を学ぶ筆者には、同じく「デモクラシー」とはなにか、それに関連する現象、背景をどう理解するか」について、議論と試行錯誤を続ける中東諸国の現状と重なる論点が多々あり、たいへん参考になりました。退職後は、学内のさまざまな責務に振り回されることなく、先生の真骨頂である日本政治史研究に専念されることと信じ、ますますのご活躍を期待しております。

宮崎先生は、一九七一年東京大学法学部を卒業後、一九七三年同大学大学院法学政治学研究科修士課程を修了

し、一九七六年同大学大学院法学政治学研究所博士課程を単位取得満期退学されました。その後、日本学術振興会奨励研究員として研究に従事され、一九七七年岩手大学人文社会科学部講師に採用され、一九八一年同大学同学部助教へ昇任の後、一九八四年に千葉大学に移られました。

千葉大学での宮崎先生の教育に対する貢献は、学部、大学院を中心に多大なものであったが、とりわけ一九九七年より一年間、千葉大学法経学部法学科長を併任されるなど、大学の運営にも深く携わってられました。改組に伴う総合政策学科の新設にご尽力された上、一九九九年に総合政策学科長を併任された他、二〇〇〇年より四年間、評議員を併任し、二〇〇三年から二年間は法経学部長を務められるなど、大学として最も重要な時期にその運営に貢献をなさいました。しかし、その激務、過大な責任の積み重ねの代償は大きく、学部長時代には体調を崩され、一時期研究に支障を来たこととなってしまったことは、残念としかいいようがありません。それでも、先生 of 教育行政に対する熱意は並々ならぬものがあり、学部長退任後も不自由な体をおして、二〇〇四年より一年間、教育研究評議員を併任し、学部内の調整に心を砕いてくれました。

先生の日本政治史研究への意欲は一貫して並々ならぬものがあり、これまでに多くの研究業績を残されております。先生は、博士論文を筆頭に八〇年代初期に発表された三つの論文、「大正デモクラシー期の農村と政党（1）」（3・完）（『国家学会雑誌』九三巻七〜一二号、一九八〇年七、九、十一月）、「大正デモクラシー期の小作関係立法事業」（『アルテス・リベラレス』（岩手大学人文社会科学部紀要）第二七号、一九八〇年十二月）、「大正デモクラシー期の産業組合…利益団体化とその限界」（『全国農業協同組合中央会編『協同組合奨励研究報告』第七輯 一九八一年）で、大正デモクラシーを研究テーマの中心に据えられ、そこから日本の政治発展全体を射程に入れた研究を進めてくれました。そこでは、デモクラシーに関する従来の議論が、「運動や集団の動向を明らかにす

るだけで、行動の大枠となる制度や政治体制の変容」(最終講義配布資料「大正デモクラシー論」再考)より)に光を当てることが多くないことを問題視し、宮崎先生は独自に、「さまざまな利害や関心が新たに出てくる過程と、そこから生ずる紛争を極小化しつつ集約し統合するシステムが形成される過程の、複合過程」としてデモクラシーを捉えられました。とりわけ、大正デモクラシーにおける農業、農村社会の持つ意味に着目された点が宮崎先生の研究の中心にあります。その論点はすでに博論の時点から長くこだわってこられた点だといえるでしょう。

千葉大学に移られてからは、篠原一編『連合政治Ⅰ』(岩波現代選書、一九八四年、「Ⅳ 戦前日本の政治発展と連合政治」、坂野潤治・宮地正人編『日本近代史における転換期の研究』(山川出版、一九八五年、「第二部序章 政党政治の定着と崩壊」(高橋進と共著、高橋のアドバイスを入れたつつ全文執筆)、犬童一男他編『戦後デモクラシーの成立』(岩波書店、一九八八年、「Ⅳ 日本における『戦後デモクラシー』の固定化」、中村政則他編『戦後日本 第2巻 占領と改革』(岩波書店、一九九五年「5 戦後保守勢力の形成」、北岡伸一・御厨貴編『戦争・復興・発展——昭和政治史における権力と構想』(東京大学出版会、二〇〇〇年、「Ⅲ 開発計画・工業化と地方政治」)など、日本政治に関する教科書的書籍の共著を多数引き受けられています。

さらに、二〇〇〇年代以降、前述のように教育行政の責務と体調の悪化に悩まされながらも、熱心に研究活動が続けられましたが、そこでは千葉県という自治体を事例とした研究へと視野を広げられ、退職される四年前に発表された「高度成長期の自治体と計画 友納県政期(一九六三年四月―一九七五年四月)の千葉県の場合」(千葉大学法学論集』二五巻一号)は、その成果と言えましょう。二〇一〇年七月千葉市議会史編纂委員会『千葉市議会史 記述編Ⅰ』(千葉市議会 二〇〇五年)などのように、千葉県・市の史料編纂事業にたずさわることも、

多々ありました。こうした執筆は地味な活動で軽視されがちですが、千葉における政治・行政を広い見地から検証する上で不可欠な資料であり、政治史研究者の行いという重要な社会的貢献として、高く評価されてしかるべきでしょう。

学内の教職員に対して常に心配りされる先生のお姿は、わずか二年間しか知己を得られなかった筆者にも印象的に残っております。そのお人柄ゆえでしょう、最終講義には多くの学生が集い、発声がご不自由であるにもかかわらず、一言も聞き漏らすまいと熱心に耳を傾ける学生の姿が、目立ちました。大学院における指導も懇切をきわめ、とりわけ留学生に対する真摯な指導によって、優秀な論文の完成へとつながってきました。その終始一貫した研究と教育への情熱が、先生の人望の軸にあることは、言うまでもありません。

大学を離れられるに際して、改めて出発点のテーマである「大正デモクラシー」を最終講義の論題にされたということは、改めてご自身の研究の出発点に立ち返って一層の研究に向かわれるという宮崎先生ご自身の宣言だったのではなかっただろうか、講義を伺いながら、思いました。先生の研究への飽くなき意欲は、常に後輩を刺激してくださいます。

そのことに対する感謝の気持ちを込めて、ここに本論集を献呈させて頂きます。